

## 産別民同がめざしたもの(1)

三戸信人\*氏に聞く



### はじめに

- 1 労働運動への参加
- 2 戦時下の左翼前歴者(以上本号)
- 3 日本労働運動の再出発
- 4 産別会議の自己批判
- 5 産別民同の結成
- 6 産別民同と新産別

### はじめに

三戸信人氏からの聞き取りは4回にわたって実施した。第1回目は1981年12月11日、法政大学市ヶ谷キャンパス内の大原社会問題研究所会議室で、第2回目は1993年5月5日、世田谷区船橋5丁目30番地の三戸氏の自宅で、第3回目と4回目は1996年12月12日と1997年1月28日、世田谷区船橋4丁目5番地の鈴木徹三氏(法政大学名誉教授・大原社研名誉研究員)宅で行った。証言時間は合計22時間に及んだ。なお、第1回目は当研究所の産別会議研究会の例会として松尾洋氏(嘱託研究員)の司会で行われ、ほかには鈴木徹三氏の協力を得て、吉田健二が聞き取りを行った。本稿は、この4回にわたる聞き取りを吉田の責任において編集し、これに三戸氏が加筆・補正してまとめたものである。

三戸信人氏は1930(昭和5)年2月、乙種の広島市立商業学校の2年生のとき芸備日日新聞社の配達人を組織したことで労働運動の道に入られ、のち全日本労働組合全国協議会(全協)の革命的反対派、いわゆる“革反”のオルグや日本共産党員として、袴田里見らと連絡をとりながら広島県下の左派系の労働運動を指導された。三戸氏は戦前に3回検挙され、1938年9月に釈放されて以降、日蘇通信社、理研、さらに日本建設協会などにおいて相馬一郎、赤津益造、細谷松太ら左翼前歴者と交流を続けられた。そして終戦後は産別会議の本部に書記として入られ、日本共産党の産別会議事務局細胞のキャップとして、さらには1947年の2・1スト以降、産別会議における民主化運動を展開し、翌48年2月13日、細谷松太、喜田康二、光村甚助、落合英一、大谷徹太郎らと産別民同を結成した。

この産別民同の運動は当時、総同盟の運動や中立系の日労会議の運動にも大きな影響を与え、

1950年7月11日における総評結成の原動力ともなっていた。今回は、三戸信人氏から産別民同の結成経緯、運動の理念、新産別への展開など、いわゆる産別民同の運動に関する経過と実態について子細に証言をいただいた。三戸氏は、すでに細谷松太氏をはじめ関係者が亡くなった現在、産別民同に関しては唯一の証言者であり、貴重な証言となっている。

なお、当研究所では1981年10月29日と11月12日、細谷松太氏からも「産別自己批判問題と民同の結成」というテーマで聞き取りを行い、これを本誌の第327、328、330号（1986年2、3、5月号、のち法政大学大原社研編『証言 産別会議の誕生』総合労働研究所、1996年に収録）に発表した。また産別民同の結成については、三戸氏自身、細谷松太、大谷徹太郎氏と3人で「産別民主化同盟結成まで」と題する座談会を開催し、回顧しておられる（新産別二十年史編纂委員会『新産別の二十年（1）』1969年）。関心をお持ちの方は合わせてお読み頂きたい。

（吉田健二）

\*三戸信人（みと・のぶと）氏の略歴

1914（大正3）年10月8日、日本植民地の朝鮮・江原道に小学校教員であった父春造と母ミツの三男として生まれた。1932（昭和7）年3月、広島市立商業学校を卒業するが、在学中から地元の芸備日日新聞社に新聞配達員として働く。1930年2月、普選2回目の第17回総選挙で高津正道の選挙応援を手伝ったのを機に労働運動に興味をもち、芸備日日新聞社の配達人を組織して労働組合を結成した。のち広島県合同一般労組に入り“革命的反対派”に属し、31年に全協のオルグになり、翌年には全協広島県地方の責任者となった。この間、日本共産党にも加入し、袴田里見らの指導を受けながら広島県下の労働運動を指導した。1934年1月、治安維持法違反の容疑で三度び検挙され、広島刑務所で服役した。

1938年9月に釈放されたのち上京した。飯田橋職業紹介所の斡旋で職を転々としながら、1939年に松方幸次郎社長の日蘇通信社に入社し、のち鋳物工場、大崎電気工場などをへて理化学研究所（理研）に移った。在職中、日本建設協会に参加し、川崎賢雄、尾崎陸、細谷松太、赤津益造、柏原実、小林吉作、伊藤憲一らと交流する。この間、日蘇通信社に在職中、東京外国語専門学校の夜学でロシア語を学ぶ。

敗戦後の1945年9月、大沢久明、柏原実、折村完一らと孫文の三民主義やアメリカのヘンリー・ウォーレスなどに学び、新民主主義同盟を結成して労働組合の結成促進に努め、また下条恭平、石坂平らの援助を得て『労働運動』（1947年1月、有紀書房）を創刊した。そして1947年2月には産別会議の事務局に書記として入り、また日本共産党にも復党し、事務局細胞のキャップとなった。

1947年の2・1スト以降、細谷松太、光村甚助、喜田康二、落合英一らと産別会議の民主化運動に取り組み、48年2月13日産別会議民主化同盟（産別民同）を結成した。同年3月5日、日本共産党から除名された。翌49年12月10日、細谷松太、落合英一らと新産別の結成を主導して政治部長となった。以後、執行委員、常任顧問として1988年3月までその任にあった。この間、川崎製鉄所争議、旭化成争議、豊和工業争議などに関係した。また1949年には社会党入党運動のなかで同党に入党し、52年に新産別の主要幹部は党籍は持たないという決議により離党した。現在は世田谷区船橋5丁目に居住され、労働組合や学術団体からの依頼で講演・講師となって外出するほかは、悠々自適の日々を過ごしておられる。著書に『新産別の二十年（ 、『労働組合の思想と行動』（1976年）などがある。

## 1 労働運動への参加

### 細谷松太のこと

ご無沙汰しておりました。お元気そうで何よりです。産別民同の結成と運動について改めて聞き直すということで、この間、1981年12月11日に大原社研で行ったヒアリングテープを聞き直し、新産別二十年史編纂委員会の『新産別の二十年( )』(1969, 88年)も改めて読んで参りました。来年は産別民同の結成50年です。大原社研も間もなく80周年を迎えますので、この機会に『証言・産別会議の誕生』(総合労働研究所刊、1996年)の続編として、『証言・産別会議の運動』を出版しようと計画しております。その続編に、三戸さんのこれまでの証言を一つにまとめて収録したいと思っています。

三戸 ぜひお願いします。この間、あなたに連絡したいと思い、大原社研に何回か連絡をとったのですが、うまい具合につながらなかったのです。

どうも失礼しました。産別民同については、すでに新産別二十年史編纂委員会編による『新産別の二十年』があり、詳しく紹介されています。また大原社研ではいまから10年前、1986年に細谷松太さんからヒアリングを行い、産別民同の運動について大体のことは理解しております。

さらに細谷松太さんの著作集、『細谷松太著作集』(全2巻、1981年)もあります。三戸さんご自身、その昔「産別民主化同盟の主張」(『労働評論』1948年5月号)を発表しておりますし、産別民同について何点もお書きになっております。今回のお話は、『新産別の二十年』や、三戸さんがこれまで証言された内容とダブらないようにお話しを頂けれ

ばと存じます。

三戸 承知しました。鈴木徹三さんから事前にあなたの要望を聞いております。できるだけそのようにします。

私は現在84歳で、残りは少ない。今日、あなたがここ(世田谷区船橋4丁目の鈴木徹三宅)に来るといので、この機会にきちんと話そうと思い準備して参りました。そして準備の手初めに30年ぐらい前、細谷松太、私、大谷徹太郎の三人で行った、この「産別民主化同盟結成まで」(前掲『新産別の二十年( )』)という座談会を読もうと頁を開いて目を通した途端、涙が出たんです…。大谷君はわずか53歳で死にました。細谷さんも先年、鬼籍に入られた。

産別民同の問題をめぐる日本共産党との話し合いが、1947年12月、豪徳寺(世田谷区)における2回目の“三風寮会議”で最終的に決裂するのです。それというのは野坂参三らとの話し合いが決裂して、帰途、細谷さんがすごい形相で私らのところに戻って来ました。野坂が細谷さんに対して、産別会議本部の事務局次長をやめて共産党本部に戻れ、と政治局の決定を命令として伝えたわけです。けれども細谷さんは、共産党本部に行くとも行かぬとも言わないで引き揚げ、「俺は今日は帰る」と一言言っただけでさっさと帰宅してしまったのです。

私らは当然、結末を聞こうと細谷さんを引き留めました。けれども彼はかあっと頭に血が上っていて、憤然と帰ってしまった。山形県人の特質なのか、細谷さんはのんびりと構え、こちらがじりじりするくらい相手を責めることはしない人でした。私自身、彼が怒った顔など見たことがない。その彼が、感情をあらわにして立腹したのです。

当然です。戦争が終わる半年ちょっと前ぐらまで、細谷さんは合わせると10年も牢屋に入れられていました。戦争が終わってホッと息を

ついたと思っていたら、逆目がくるんですからね。3人で行った座談会の頁をめくった途端、「三風寮会議」や細谷さんと大谷君のことが「わあっ」と浮かんできて、涙が出てしまったのです。

産別民同の旗揚げから、もう50年も経ちました。産別民同の50周年を記念する集いが企画されているという話も聞いていない。新産別も解散したし、産別民同の旗揚げに参加した連中はみんな鬼籍に入ってしまった…。産別民同の運動も、日本労働運動史の一齣になったのですね。

#### 労働運動への参加

僕はこれまで3回、三戸さんから直接聞き取りを行いました。経歴についてきちんとお聞きしておりませんでした。三戸さんの経歴は、青木書店の『日本社会運動人名辞典』（1979年）で紹介されている通りなんです。

三戸 あれは私がしゃべったのではなく、誰か他の人が話したのを編集委員の方がまとめたようです。

さて、私が労働運動の道に入ったのは高津正道さんとの出会いがきっかけとなっています。昭和5（1930）年2月、普選2回目の第17回総選挙が行われました。高津さんは前年の2月、郷里の広島県で村井一夫、佐竹新一、高橋武夫らと中国無産党というローカル政党を結成して、独自の政党活動をしていました。そして普選2回目の総選挙に、その中国無産党から立ったのです。高津さんは結局、落選したのですけれども、私がそのとき高津さんと出会い、選挙活動を手伝ったことが、結果的に私が労働運動の道へ入るきっかけとなっています。

関連して述べておきます。私は16、7歳のころから『芸備日日新聞』というローカル新聞社

の新聞配達をして学資を稼いでおりました。この『芸備日日新聞』は、終戦後に『中国新聞』と合併するのですが、もともとは民政党系の新聞社です。他方『中国新聞』のほうは政友会系で、両者が合併して現在の『中国新聞』になります。

この『芸備日日新聞』は、民権論の論客の中江兆民に師事していた前田三遊が記者として勤めていた、当時としては進歩的な傾向の新聞社でした。同じ中江兆民の弟子の、大逆事件で絞首刑となった幸徳秋水も一時期、この芸備日日新聞社に勤めたことがあったのです。前田三遊についてはほとんど研究されていない。彼は労働運動にも理解があり、のち友愛会広島支部の支部長にもなっていますよ。

私は、その『芸備日日新聞』に新聞配達人として勤めていて、16、7歳のころ20人ぐらい集めて芸備日日新聞社配達会というような名称の、新聞配達員の組合を結成しました。これも昭和5年の春のことです。そして、何回か会社側と賃上げなど待遇改善の交渉をしたのですけれども、結局、会社から睨まれて間もなく潰され、私自身、芸備日日新聞社をやめざるを得なくなりました。

私が高津さんと出会ったのはその直前ぐらいなんです。高津さんは当時、肺病を患っていて、体が痩せこけておりました。高津さんはその痩せこけた体で、一人で選挙演説などをしていました。よたよたしながらポスターを貼っていたのです。私は何回かそうした光景を見て気の毒に思い、志願して彼の選挙事務所を訪ねて手伝いを申し出たのです。当時は“伝単貼り”といっていましたけれども、私は、高津さんが労働者に投票を訴えるスローガンを新聞紙や模造紙なんかで大書したポスターを、糊と刷毛を持って方々を歩き回り電柱なんかには貼っていたのです。

このときの選挙活動を通じて私は高津正道さんと知り合い、高津さんを通じて鈴木(茂三郎)さんとも仲が良かった村井一夫、佐竹新一、高橋武夫らと交流することになったのです。

だから、私の無産政党や労働運動との直接の関係は昭和5年の初め、普選2回目の第17回総選挙以来のことなんです。また系統としては、高津さんたちの中国無産党はのち全国大衆党に合流するのですが、私は全国大衆党(のち全国労農大衆党)の左派で出発しました。労働運動の方では、私は間もなく合法舞台では中間派の全労(全国労働組合同盟)系の革命的反対派、いわゆる“革反”で活動を行っていました。

#### 高津正道のこと

三戸 今回は、夕方までたっぷり時間があります。この機会に是非、高津さんのことについて述べておきたいと思います。

高津さんは昭和49(1974)年1月、80歳ちょっとで亡くなりました。高津さんは当時、阿佐ヶ谷(杉並区)に住んでいました。日本社会党には彼を党葬にしたいというような話もあったらしいのです。しかし高津さんは勲章や肩書やバッジ、要するに名利を求める人ではなく、そうしたことは大嫌いで、葬式は隣家の八百屋さんや隣組の床屋さんたちが仕切って執り行いました。高津さんの遺言だったのだろう、本当に小さな葬式でした。葬儀には成田知巳さんが社会党の委員長というよりは個人の資格で、また労働運動の関係では大門義雄と私の二人が出席してお別れをしました。

大門義雄さんとは、戦後再建された総同盟の中央幹部で、高野実総主事の代理(主事)などをされた方ですね。

三戸 そうです。大門さんは古い活動家で、戦前は瓦斯工組合の幹部として有名な方です。

私は高津さんから、社会主義の思想や理論な

どをとりたてて教わったという事実はないので。けれども人間のあり方というのか、人間の心というのか、高津さんからは労働運動以外の面でたくさん学びました。高津さんの人格高潔さ、人間としての温かさは彼自身、浄土真宗の住職でもあったので仏の心に通じるものがあったのかもしれない。

この点についても紹介しておきます。平凡社の社長の下中弥三郎は戦時中、左翼にたいへん理解を示し、志を持つ人を大事にしていました。高津さんは、人民戦線事件で鈴木(茂三郎)さんたちと検挙され、釈放されたのちは下中弥三郎の世話になっていました。細谷(松太)さんもそうです。占領期に徳田球一の側近の一人で“情報係”となっていた山崎早市も戦争中、下中に飯を食わせてもらっていたのです。山崎早市だけでなく、敢えて名前をいわないけれども、戦争中に下中弥三郎に飯を食わせてもらい、身を守ってもらった左翼は実に多いのです。彼らの多くは戦後になってこの事実を隠し、ほとんど語っていない。

高津正道氏は日本共産党の創立のメンバーでもありますね。

三戸 そうです。高津さんの思想は実に多様で、アナキズム、 Kommunismus などいろいろな要素があったと思います。昭和5年2月の総選挙に立ったとき、彼は福本イズムの共産党と決別していました。

高津さんの根幹の思想は、社会正義や人間愛みたいなものだと思います。早大時代は民人同盟のほか、アナキーの団体にも入っていたようです。また暁民会を結成して、いわゆる“暁民共産党事件”で検挙されています。また大杉栄や石川三四郎とも交流がありました。

余談ですが私は戦後すぐの時期、『労働運動』(1947年1月、有紀書房刊)という雑誌を下条恭平の資金援助を得て創刊しましたが、その題

号は、大杉栄や荒畑寒村、それに高津正道さんも関わったアナ・ポル合作の『労働運動』からとったものなんです。現在、この『労働運動』はどこにもない。

いや、何号か欠号がありますけれども、私どもの大原社研に所蔵されています。僕は『労働運動』を当初、産別会議の機関誌と理解していましたがどうも違うようで、社会党と共産党の合同をめざすような、いわば社共の統一を志向するような雑誌ですね。創刊号で風早八十二や三田村四郎、吉田資治のほか、細谷（松太）さんや加藤勤十などが寄稿しています。

三戸 私の家の物置に飛び飛びで何号かはあります。雑誌が大原社研に所蔵されているとは驚きです。あの『労働運動』は長く続かなかったけれども、当時、割り合い評判が良かったのですよ。

#### 上京と共産党への入党

三戸 芸備日日新聞社の配達人の組合が潰され、高津さんの選挙も終わって1年ぐらいして、私は中国無産党の影響下にあった労働組合、すなわち広島県合同一般労組に入っていわゆる全労の“革反”の運動に参加するのです。その直前に私は全協に入っています。私は全協の“革反”のオルグであることを隠して、合法舞台の全労に入って活動していたのです。これは昭和6、7年ころのことです。

全協の“革反”の指導部の指示で動いたのですね。

三戸 そうです。日本共産党 全協指導部のラインで動いておりました。

日本共産党に入られたのはいつですか。

三戸 昭和7年です。私は昭和7年に東京の山谷に移ってから、広島と東京を往復してい

ました。全協の指導部と連絡をとったり、日本共産党の中央委員であった袴田里見と連絡を取り、その指示を受けて広島に戻って実践するなど、20前後の歳ながら指導的な立場に立っていたわけです。

こんな生活が昭和9年まで3、4年ぐらいつづきました。この間、私は2回ほど治安維持法違反の容疑で検挙されましたが、さいわい共産党との関係が察知されず、起訴猶予となって逃げ切りました。

昭和7年10月に、“共産党熱海事件”という事件が起きています。これは、共産党が静岡県熱海町で全国代表者会議を開くため集った風間丈吉、岩田義道らの幹部や、地方代表者がごっそり検挙された事件で、確か翌月に岩田義道が虐殺されています。この“共産党熱海事件”で広島県の組織も潰れたのです。

私は昭和8年の2月ぐらいから広島県に張り付き、共産党と全協の組織再建にあたりました。そして、重点地区であった呉地区や岩国地区のオルグをやっている最中に、昭和9年1月のことですが治安維持法違反の容疑で東京で検挙され、今度は牢屋に入ったわけです。懲役5年の判決で、釈放されたのは昭和13年9月のことです。大ざっぱですが、以上が、私の戦前における活動の経過です。

日本共産党への入党はどなたの推薦だったのですか。

三戸 当時、大衆団体に所属する者は推薦人や紹介者なんか必要なかったのです。共産党の中央部は当時、昭和4年の4・16事件につづき、翌年には田中清玄らも検挙されて、党員は一生懸命、組織の立て直しをやっていた時期でした。私が入党したころの指導部は、野呂栄太郎の指導下に袴田里見や逸見重雄などが中心となって動いていたと思います。逸見さんは戦後、法政大学の教授になりました。

余談ですが、私がいま着ているこのジャケットは袴田里見のものです。彼が1960年11月、モスクワにおける81カ国共産党・労働者党代表者会議に、日本共産党の代表団長として参加したときに着て行ったものと聞きます。袴田が先年亡くなったとき、奥さんが三つ揃いと一緒に私に形見としてくれたものです。

産別民同の話より、こっちの方が面白い(笑い)。

三戸 袴田は戦前型の革命家というか、気骨ある指導者でしたよ。人情も厚い。私は昭和7、8年ごろの時期、共産党や全協の活動では彼と連絡をとって動いていました。日本共産党のもう一人の中央委員の逸見(重雄)さんとも、戦前は時々会っていたのです。彼らは中央の指導部にいて活動を統率し、私はその指導・指示なりを受けて東京や広島県で動いていたわけです。

私は通常、片道の旅費で東京に来て、帰りは袴田から横浜駅などに送ってもらうという調子でした。だから昭和9年1月に検挙されるまでは、そういう形で広島県下の全協や日本共産党の組織再建に務めていたのです。あとは5年間、“赤い服”を着て過ごしたわけです。

“赤い服”？

三戸 受刑者は当時、刑務所内ではみな“赤い服”を着せられていました。“赤い服”といえば、受刑者のことですよ。未決は“青い服”だったのです。

治安維持法違反で検挙され、懲役5年の実刑を受けたとのことですが、どちらの刑務所で服役されたのですか。

三戸 広島刑務所です。当時、私は思想的には転向していましたが、検事局の取り調べでは終始、黙秘を貫き、調書への署名にも従わなかったので重すぎた刑期になったようです。ただし黙秘といっても思想・信念を貫いて黙秘した

ということではなく、拘留中に特高刑事からひどい暴行を受け、もうどうにでもなれと半ば投げやりのような形で証言を拒否し続けたのです。

私は獄中では、とにかく歴史の本だけはよく読みました。けれども肋膜炎も患って、とても苦しみもしました。

私の戦前の活動は、昭和9年1月における検挙で終息しました。私が属していた全協もその年のうちに指導部は崩壊していますし、共産党の方も年表などを見ますと昭和10年の3月に最後まで残っていた袴田里見が検挙され、中央委員会は崩壊しています。私は昭和13年9月に仮釈放されたのですが、そのころは労働組合は戦時色を強め、産報運動も始まっていて、私の古巣の合法左翼でも動ける状況ではなかったのです。

## 2 戦時下の左翼前歴者

釈放、そして上京

三戸さんが釈放されたのちの、戦時体制下の活動や生活についてお聞きたく存じます。

三戸 先ほどの繰り返しになりますが、私が仮釈放された昭和13年は国家総動員法が施行された年です。この年は産業報国連盟が結成された年でもあり、全総(全日本労働総同盟)が“銃後三大運動”を決議して戦時協力に大きく傾いた年でもありました。労働組合の運動は全体として時局へ迎合し、右傾化し、産報運動が始まっていました。もう私らが活動ができる状況ではなかったのです。

しかし社会運動の状況はそうでも、私自身、どう生活するのかについては悩みました。私の本籍地である広島県高田郡吉田村では“村から国賊が出た”ということで騒がれたり、田舎で

職を探すこともできなかった。釈放された仲間の多くは大陸（中国・朝鮮）に渡っています。私は古い友人を訪ねて、東京に移ることにしました。

私は上京しても住むところがなかった。私は昭和7年ごろ、東京にいる間の宿としてスラム街の山谷（台東区）に住んでいたことがありました。私は一時、その山谷に寝起きしながら口入れ屋の世話で新聞配達をしたり、飯田橋の職業紹介所に通って封筒の宛名書きなどの仕事を紹介してもらい、何とか食いつなぎました。中野重治なども当時、私と同じ封筒の宛名書きで食っていたのですよ。

私らは「国賊」「アカ」と呼ばれ、定職に着くことは何か特別な事情がないかぎり無理でした。実際、最初のうちは東京保護観察所からしょっちゅう呼び出しがあり、仕事といってもおのずと短期的な仕事になってしまいます。そうした戦時の生活でも、比較的長く勤めたのが日蘇通信社と理化学研究所なんです。

#### 相馬一郎と知り合う

三戸 偶然とは面白いものです。私が飯田橋の職業紹介所から紹介され、封筒の宛名書きの仕事で行ったところが、国民精神文化協会だったのです。文部省が昭和7年（1932年）にいわゆる“日本精神”や国体の原理を究明して、外来のマルクス主義に対抗して日本の伝統的な価値や国民文化を啓蒙・啓発するために設置したもので、日比谷（千代田区）にありました。

この国民精神文化協会に通っていた連中は、みな左翼前歴者なんです。要するに左翼前歴者の“思想善導”を行うための機関なんです。私はそこで相馬一郎と知り合いました。相馬一郎は、日本共産党の創立時のメンバーで、南葛労働会の幹部だった人です。彼はソ連に渡ったクートベ（東洋勤労者共産主義大学）組でもあり

ました。相馬さんは穏やか人柄で、人望もあり、ほんとうにいい人物でした。

自殺したそうですね。

三戸 そうです。例の3・15事件（1928年）で、日本共産党の指導部は大きな打撃を受けました。相馬さんは党再建の任務を担って、急ぎょソ連から帰国したのです。けれども相馬さんはその年のうちに検挙され、懲役10年の刑を科され、たぶん5、6年服役したのち“転向”して釈放され、いわゆる“思想善導”を受けていたわけです。私は相馬さんに、国民精神文化協会に通っていたときにお会いしたのです。

おっしゃる通り、相馬一郎さんは自殺しました。相馬さんは釈放されたのち、陸軍省に関係し、関係したというよりは協力させられたわけで、陸軍大将のプレーンとかになって中国大陸を視察したらしい。相馬さんにはそういう経過がありました。相馬さんは当時、“自分は誤った道を踏んだ”といわば自責の念に駆られたのでしょうか、昭和14年の11月に自殺したのです。私と知り合って、そんなに時間は経っていませんよ。苦悩したすえの自殺でしょう。

#### 日蘇通信社に入る

三戸 さて、私が相馬さんと知り合った当時、彼は日蘇通信社に関係していて、学術面で活躍していました。彼はクートベ帰りですからロシア語に堪能です。日蘇通信社は当時、『世界年鑑』を出していました。いや、発刊の準備をしていたのかな。『世界年鑑』は日本で唯一のソ連事情に関する年鑑で、ソ連・日本・中国大陸の事情や国際情勢の分析では定評があったのです。

日蘇通信社が出していた年鑑は『世界年鑑』でなく、『日蘇年鑑』じゃないでしょうか。『日蘇年鑑』（のち『蘇連邦年鑑』に改

題)は、1935(昭和10)年に発刊されています。また『世界年鑑』のほうは遅れて1939年に、日本国際問題調査会(会長・西園寺公一)から創刊されていて、前身は『日本国際年鑑』です。この『日本国際年鑑』の発刊は『日蘇年鑑』と同じ1935年だと記憶しています。

三戸 詳しいですね。近衛文麿のブレンと云った笠信太郎なんかも書いていた年鑑なんですよ。尾崎秀実も書いていた。

ええ。それは『日本国際年鑑』です。僕は、日本国際問題調査会や太平洋問題調査会に興味をもった時期がありました。この二つの調査機関は不思議なことですが、左翼前歴者が実に多いのです。それで、具島兼三郎さんや石村海三さんから聞き取りをしたことがありました。具島さんは『世界年鑑』の執筆者で、石村さんも日本国際問題調査会に研究員として勤務され、年鑑の執筆をなさっております。

三戸 それなら『日蘇年鑑』かもしれない。とにかく『日蘇年鑑』はロシアの最新の情勢や問題を理解するには不可欠な文献で、相馬さんはその年鑑の編集や、さまざまな文献出版の編集を担当されていたのです。

話を戻しますと、私は国民精神文化協会で相馬一郎さんから原稿の校正をやれる人を探しているということを聞きました。そして私自身、多少勉強もしたかったので、彼の紹介で日蘇通信社に嘱託のような形で入ったのです。日蘇通信社は、松方財閥が経営していた通信社で、当時の社長は松方幸次郎でした。あなたがいま言われたように、この通信社にも左翼前歴者がたむろしていたのです。

僕はかつて、松本重治氏の紹介で、松方幸次郎家に繋がる親族の方から『民報』という新聞社の経営事情について聞き取りを行

ったことがあります。戦前は同盟通信社の経済記者で、戦後は共同通信社の専務理事をなさった方です。松本重治氏も、松方正義伯の息子で戦後、共同通信社の理事長になられた松方三郎氏も、かつては新人会や社会思想社のメンバーで、太平洋問題調査会にも名を連ねていたのです。

僕は、とても不思議に思っていることがあります。松方・松本家は新興財閥です。また理研コンツェルンの大河内正敏もそうですが、戦時中、新興財閥の企業になぜか左翼前歴者が集まっています。既成財閥と違って、なぜ新興財閥がリベラル派や左翼に理解があったのか、僕自身、解いてみたいテーマの一つなんです。

三戸 私も終戦まで理研に勤めていました。そうです。左翼に理解があったかどうかは別にして、日蘇通信社にしろ理研にしろ、左翼の前歴者が多数、会社に勤めていたことは事実です。

日蘇通信社にもリベラル派や左翼前歴者がたくさんおりました。相馬一郎は日本共産党の創立時のメンバーですし、毎日新聞社の元記者で日本のジョン・リードといわれた黒田乙吉とか、鈴木東民なども関係していました。相馬一郎の弟分の服部麦生(むぎお)も社員でした。服部麦生は、堺利彦や幸徳秋水らの活動を助け、横浜平民社を結成した服部浜次の息子です。息子の「麦生」という名前は、『一粒の麦』からとったものなんだそうです。

社長の松方幸次郎さん自身、倉敷紡績の大原孫三郎さんと並び、労働者の福利や労働問題に理解をもつ進歩的な経営者なんです。

松方幸次郎といえば、第1次世界大戦の前後、円の強い時代にロンドンやパリで膨大な美術品を買い集め、そのうち絵画の一部は松方コレクションとして、現在、上野の国立西洋美術館に

収められています。ご存じでしょうがその松方さんは神戸の川崎造船所の社長のとき、大正6年だったのかな、日本で最初に8時間労働制を実施した人なんです。

大原孫三郎さんも、大正時代にヨーロッパで名画を買い集め、私らは現在、それらの名画を倉敷市の大原美術館で鑑賞することができます。大原孫三郎さんにしろ松方幸次郎さんにしろ、日本では異色の経営者です。

日蘇通信社について、もう一つ紹介したいことがあります。当時、日蘇通信社には“五月会”（さつきかい）といていたと思うけれども、編集局長の角谷健次が表向きとなって、ソ連をはじめ世界の政治経済の情勢を分析する勉強会みたいなものがあつたのです。この“五月会”には近衛文麿のファンで、山崎経済研究所を主催していた山崎清純や、朝日新聞社の笠信太郎、近衛のブレーンの尾崎秀実、さらに昭和研究会のメンバーの連中が自由に出入りしていました。

この“五月会”を事実上、運営していたのが松方公望で、松方幸次郎の息子だったのか知らないが、とにかく松方家の人間でした。私は一時、この“五月会”の勉強会のさい書記として速記をとっていたのです。あの速記録がもし戦後まで残っていたら、日本現代史の貴重な史料となったと思いますが、敗戦で処分されたのでしょうかね…。

日蘇通信社は当時、『月刊ロシア』や『ソヴェート現勢資料』を発行していましたね。

三戸 私は当初、その『月刊ロシア』の校正係として入ったのです。仕事は、まあ面白かった。校正しながらロシア語やソ連の歴史を勉強できましたし、ソ連の最新の事情も知ることができました。私は最初は『月刊ロシア』の編集、次に通信版の北洋漁業関係の記事を受けもつて

いたのです。

この間、私は東京外国語専門学校、すなわち現在の東京外語大の前身の夜学に入学し、1年ちょっとの間ロシア語を学び、ロシア語の新聞や雑誌の見出し記事ぐらひは読めるようになりました。だから私は一時、この日蘇通信社に居座ろうかとも思ったのです。けれども、どういふわけか労働組合関係出身では雰囲気合わないというのか、まあ性に合わず、結局辞めたのです。

#### 理研に入る

理研に入られたのは、その後ですね。

三戸 いや違います。日蘇通信社のあと、中島飛行機の下請けの鋳物工場や、“帝都暗黒事件”（昭和初期の関東配電スト計画）の片山徳治の紹介で大崎電気にも勤めています。またちょっとの間ですが、羊毛統制会という団体にも勤めています。

このうち鋳物工場は従業員200人位の中小工場で、汚職が蔓延していた会社でした。この工場は軍需工場で、軍からさまざまな物資や特配が回ってきていました。ところが社長はじめ役員連中がそれらの物資を職場に下ろさず、みな横領してしまうのです。労働者はこれをよく見ていました。だから軍部がいくら生産増強を叫び、督励したって、労働者に生産意欲なんか湧いてくるはずがない。経営者は腐敗していました。

次の大崎電気も同じなんです。これも実にひどい会社でした。ここの社長は私に直接「リポートを持って来い」と要求し、断ると会社を辞めざるを得なくなる嫌がらせをしたのです。戦時下の経営者は金儲けに狂奔し、“聖戦”とか“お国のため”とかいっていたけれども、利己しか考えていなかったのです。だから私は煙たがられ、二つの会社とも1年ぐらひで辞めざ

るを得なかった。このあと羊毛統制会に移ったのですが、ここでは前歴がバレて首になりました。理研に入ったのはその後で、昭和19年に入ってからすぐのころでした。

私は理研には1年半在職し、敗戦の当日までおりました。

私が理研に入社したのは、細谷(松太)さんも入っていた日本建設協会に顔を出して、理研の左翼前歴者とコネが付いたからです。日本建設協会は当時、新宿の尾崎陸(おざき・すすむ)さん宅で行っていました。私も誘われて尾崎さん宅に通い、勉強会というか情報交換会のようなものに参加しました。そこでの研究会に赤津益造さんや、理研に勤めていた人も出席していて、その彼に「理研に来いよ。まあ履歴書は俺に任せろ」といわれ、私も前歴を隠し履歴を詐称して入社した、という経過です。理研には前歴を隠して入っていた人がかなりおりましたよ。

履歴詐称とは大胆ですね。

三戸 井汲卓一さんのように、理研の社員は第一高等学校・東京帝大卒業組や中退組が多かった。私たちが何人が誘ったその人の話では、理研には前歴を隠して入っているかつての左翼が多数在職しているというのです。そして、履歴書などの人事書類は金庫に入れることになっていて、内部の職員でも開けられないからバレることは絶対にない、ということでした。

私は半信半疑だったが、実際にそうだったのです。だから私立大学卒業とか、専門学校卒業とかの出鱈目な学歴で入社した人は何人もいたようです。しかしそうした学歴ではかえって怪しまれ、会社から戸籍謄本の提出を求められる場合もあるかもしれない。そうなると戸籍謄本には前科が記載されていますから、学歴も左翼の前歴もバレる危険があります。それで彼は「私立大学卒だとかえって怪しまれる。その裏

をかけ。ちょうど面接者が東京帝大の中退だから、お前も帝大中退の学歴にしろ」といわれ、その通りにしたら面接試験に合格してしまった(笑)。私は30歳と年齢もくっていたので、課長待遇で入社したのです。

#### 戦時下の理研

先ほど赤津益造さんの名前が出ました。赤津益造といいますがともと政治研究会のメンバーで、1926(大正15)年12月に再建された日本共産党で活躍され、28年の3・15事件で検挙されたあの赤津さんですね。

三戸 そうです。赤津さんは日本建設協会の農村関係を受け持っていました。彼は理研とはあまり関係ない。ともあれ理研は当時、まあ“左翼の隠れ蓑”になっていたのです。井汲卓一や、終戦直後のころ日本共産党の事務部門に務めていた竹村悌三郎など、私の知人のほかに左翼前歴者はごろごろしていたのです。

理研の総帥・大河内正敏の息子の大河内信威、すなわち小川信一氏がもと日本共産党員で、彼が左翼前歴者をかばっていたそうですね。

三戸 そうです。小川さんは大河内正敏子爵の長男として生まれ、旧制の浦和高校時代から新人会のメンバーだったらしい。左翼では有名人でした。プロ科(プロレタリア科学研究所)の書記長にも就任し、私と同じ頃に日本共産党に入社したのです。

小川さんは理研コンツェルンの一つ、理研工業でも睨みを利かせ、何かあれば前歴者をかばって大事にしていたのです。小川さんのお陰で命を長らえた左翼の人はかなりいると思いますよ。

小川信一氏について、これまで日本近代史においては顧みられず、研究もほとんどないですね。

三戸 残念なことです。井汲卓一さんも、実際は彼に助けてもらったのです。井汲さんは理研工業の支配人かなんかでした。その前は朝鮮の出張所長をしていたと思います。大河内正敏が左翼前歴者を助けることは考えられない。小川信一さんの配慮があったと思うのが自然だろう。仁科芳雄研究室や彼が指揮する関連工場では、要職にほとんど左翼前歴者が並んでいました。私は仁科研究室の希元素部に入ったのです。

理研については当然、警視庁も目を付けていたと思うのですが。

三戸 理研は治外法権だったのです。大河内家が皇室とつながっていたからか知らないが、警察も立ち入ることができなかった。実際、私が勤めていた1年半の間に特高刑事が私を訪ねて来たことはなかったのです。とくに仁科研究室とその関連工場には研究員とその補助員以外、絶対に入れなかったのです。

仁科芳雄研究室では当時、原爆研究も行っていたといわれていますね。

三戸 その点について、詳しくは知らない。理研は軍部と深く関係していた研究所であり、コンツェルンでした。戦争の真っ最中だということに、理研にはのんびりした雰囲気がありました。私は仁科芳雄研究室の希元素部の勤労部にいましたが、理研には東京や周辺にかなりの工場があり、私は毎日、空襲で壊れた工場の後片付けや、怪我をした工員の救出、死骸の片付け、死んだ工員の葬式などを手伝っていました。私は8月15日の敗戦の当日まで、そんな仕事をしていたのです。

#### 大阪製鎖造機のもと左翼

三戸 左翼前歴者が戦時中どんな生活をしてたのか、誰もが戦後になってもあまり語っていないというのか、話したがらない。そりゃ、

いろいろ事情や配慮がありますよ。すべて明かせばよいというものでもない。

私はいま、理研に左翼前歴者が潜っていたという話をしました。こういう例はほかにもかなりあったと思います。私はその昔、相沢尚夫君と話をしている理研の場合と同じだなあ、と思ったことがありました。

相沢尚夫氏からは先年、江戸川区本一色のご自宅を訪ね、聞き取りをして参りました。もっぱら日労会議や“山川新党”に関する話で、本来の大杉栄や石川三四郎との交流、それに大正・昭和初期のアナーキズム運動についてはまだなんです。

三戸 相沢さんはもう90歳だろう。とにかく早く話を聞いたほうがよい。その相沢尚夫さんは戦時中、大阪製鎖造機に勤めていました。大阪製鎖造機も、理研と同じように特殊な経営者だったらしい。

相沢さんは戦後、日労会議の幹部になります。また同じ日労会議の議長であった谷口清さんも大阪製鎖造機に勤めていました。友愛会の海員部の古い活動家に、田中松次郎という人がいます。彼はクートベ組で、戦後は海員組合の結成を指導し、昭和21年の9月の海員ストでは中闘の委員長になるのですが、彼も戦時中は大阪製鎖造機にいたのです。

また昭和の初め、総同盟大阪合同労組の幹部で、私と同じ全協の“革反”で活躍した津脇喜代男さん、彼は戦後、私鉄総連を結成するのですけれども、津脇さんもかつては日本共産党員で、大阪製鎖造機に潜っていたのです。そして、大阪製鎖造機にいた左翼前歴者は戦時中、いまあげました連中を中心にいろいろな形で活動をつづけ、終戦と同時に津脇さんが「やろう」と声をあげて、大阪では2、3番目くらい早く大阪製鎖造機の労働組合を結成したのです。

戦後になってGHQの奨励もあり、労働組合

が爆発的に結成されました。終戦の年の12月に、もう労働組合の数は戦前の最高を越します。労働組合の結成も運動も、あのように爆発的に発展した背景の一つは、左翼前歴者が戦時中、経営の中に潜り、しっかりと生き延びていて、かつ地道な職場活動があったからだと思っています。

そうですね。“転向”もありましたけれども、戦時中における旧左翼の人たちの活動に注目する必要がありますね。

三戸 そうです。戦後、理研においても立ち上がりがあったのです。理研の場合、労働組合の結成だけでなく、日本共産党の組織化の動きが終戦と同時に始まっていて、竹村悌三郎はじめ多くの左翼前歴者がいっせいに復党ないし入党したのです。私自身は、この時流には乗らなかった。

日本共産党が正式に合法再建され、その第一歩を踏んだのは昭和20(1945)年11月8日、できたばかりの代々木の本部で開かれた全国協議会からなんです。ここで行動綱領草案や規約草案、共産党の当面の活動方針が議論されました。

実は、日本現代史に記録されていないけれどもその直前に、昭和20年の10月中だったと思うが、東京周辺に住むかつての“理研組”の黨員連中が、誰かの呼びかけで理研に集まって会議をもちました。私は、すでに新民主主義同盟の活動を始めており、そのときは共産党に戻るという気持ちがなかったのですけれども、首に縄を付けられたような形でその集会に参加したのです。要するに、理研に潜っていたかつての共産黨員が党再建の準備を手伝ったような、そういう動きがあったのです。

存じませんでした。

日本建設協会のこと

三戸 戦時中のことでもう一つ、この機会に紹介しておきたいことがあります。それは先ほどちょっと話が出た、日本建設協会のことなんです。日本建設協会に加わった連中もほとんど全員が前科者というか、左翼前歴者で、日本共産黨員、全協、全農全会派、全国水平社の関係者が多かった。

日本建設協会のメンバーは戦後、社会運動の各方面でずいぶん活躍しました。ざっと名前をあげると、共産党関係では細谷松太、伊藤憲一、信州の“赤い村長”として有名な北原亀二や、党の長野県委員長となった田中操吉もそうです。長野県は日本建設協会の拠点でした。赤津益造については、先に名前をあげましたが、もと総同盟の本部員で、戦後は日本社会党の代議士を長く務めた穂積七郎も常連だったので。総同盟の関係者は、穂積さんのほか何人かおりました。またこの間亡くなった上田音市や、野崎清二、北原泰作、山本利平、朝田善之助など全国水平社の幹部連中、さらに戦後ずっと同志社大学の政治学かなんかの教授であった岡本清一や、それに外務省に勤務していた神谷茂、戦後すぐ東交の結成に参加した村越喜市もメンバーでした。

日本建設協会は、川崎堅雄(かわさき・けんお)氏が主導して組織した国民運動組織ですね。僕は、この日本建設協会について旧左翼が展開した翼賛運動の一つの形態、と理解しているのですが。

三戸 まあ、そうです。日本建設協会の設立の経緯について、私はそんなに詳しく知っているわけではないのです。とにかく、私が刑務所を出た年の昭和13年11月あたりに緋田工(あけだ・たくみ)や川崎堅雄、戦前に“赤い裁判官”として有名であった尾崎陞、それにいま名前をあげた岡本清一らが日本国体研究所という団体をつくったのが出発だったらしい。

日本国体研究所は近衛文麿をかついで旧体制を革新しようという、いわゆる“新体制”運動の系譜につながるものだと思います。日本建設協会の理念も、基本はそこにありました。あれは近衛さんに期待した運動なんです。

その最初の日本国体研究所は、昭和15年に運動の路線をめぐる対立し、川崎堅雄、赤津益造、尾崎陞らが新しく日本建設協会という団体をつくったのです。名前のとおり新しい日本国家を建設する、あるいは革新的な政治体制を構築する、要するに“近衛新体制”を支持しその実質をつくる運動体の一つだったのです。私はその日本建設協会に、最初はいわばオブザーバーとして参加していたのです。

三戸さんご自身、正式メンバーであったのですね。

三戸 まあ…。日本建設協会について、私はそんなに詳しく記憶していないのです。志はいろいろあったかもしれないが、実際にどんな運動をしたかと聞かれても、これだというのは浮かんでこない。政治、経済、労働、農業・農村などに分かれて勉強会を持ち、私は労働問題の部会だけに出席していました。労働部会は通常、新宿の尾崎陞さんの自宅で開かれていたのです。

日本建設協会は昭和16年ごろ、当局からも睨まれるようになっていて、そんなには続かなかったと思います。私自身、協会に対しては、とくに太平洋戦争を肯定する“聖戦論”には納得がいかず、途中で勉強会に出席しなくなりました。

(つづく)



99 July  
No.36

女性労働研究  
The Bulletin of  
the Society for  
the Study of  
Working Women  
女性労働問題研究会 編

## 研究と運動を ジェンダー視点でつなぐ 女性労働についての研究誌

---

『女性労働研究』36号 (1999年7月発行)

<p>巻頭 国際高齢者年と日本の課題 <span style="float: right;">松村祥子</span></p> <p><b>特集1 家族・介護・地域と女性の労働</b></p> <p>介護労働はいかにあるべきか <span style="float: right;">堀越栄子</span></p> <p>—ベイトワークとアンベイトワークの狭間で—</p> <p>家族介護から地域介護へ <span style="float: right;">和気まどか</span></p> <p>—「くらしすけあいの会」の現場から—</p> <p>「たすけあいワーカーズ」の現場から <span style="float: right;">山口文江</span></p> <p>—「NPOアビリティクラブたすけあい」の実践—</p> <p>公的介護保険制度のジェンダー問題 <span style="float: right;">伊藤周平</span></p> <p>シングル女性のリタイア生活 <span style="float: right;">五十嵐美那子</span></p> <p>—「シングルだから」を乗り越えて—</p> <p><b>特集2 人事考課のジェンダー差別とどうたたかうか</b></p> <p>成果主義賃金と人事考課 <span style="float: right;">遠藤公嗣</span></p> <p>人事考課のジェンダー差別への挑戦 <span style="float: right;">宮地光子</span></p> <p>—裁判で人事考課表の開示を求める—</p>	<p>&lt;研究ノート&gt;女性農業者に関する研究の国際的動向 <span style="float: right;">粕谷美砂子</span></p> <p>「年表・戦後女性労働運動」その1(1945～49年) <span style="float: right;">戦後女性労働運動史年表サブ研究会</span></p>
--	--

本体価格 1,500円  
年間定期購読料 3,300円<改訂、年2回・送料込>

<申込み先>  
郵便：〒113-0021  
東京都文京区本駒込5-16-9  
学会センターC21  
日本学会事務センター気付  
女性労働問題研究会  
FAX：045-962-6031

編集・発行：女性労働問題研究会  
発売：ドメス出版 〒170-0003 東京都豊島区駒込1-3-15